

あらすじ

喫茶ボンボン……。昭和から続く老舗の小さな喫茶店だが、時代の変化に取り残されて、現在は閑古鳥の鳴く毎日。客のいない店内で、店名の由来にもなっている古いボンボン時計の振り子がさびしくゆれている。

ジャズピアニストの立花静夫（45）は、客の来ない店で誰に聞かせるわけでもなくピアノを演奏をしている。十年ほど前まではトリオを組んだりして、それなりに活動したようだが、結局無名のままで終わった。喫茶店のマスターの小林良一（60）は、少ないながらもギヤラを支払って立花に演奏を頼んでいる。店じまいもそう遠くないと思っている。ながら、ひとり立花の演奏を聞いている。

ある夜の閉店後、小川春子（25）が店に飛び込んでくる。小林は不意の来

客に戸惑いながらも、春子を店に招き入れる。春子は舞台俳優志望だが、オーディションにも落ち続け、家賃を滞納してアパートも追い出されたという。小林は春子の明るく積極的な人柄に乗せられて、店の二階の空き部屋を提供する。春子は住み込みで店で働くことになる。

春子の登場が変化を呼び込む。若手の漫才コンビが師匠の前でやるネタを練習しに来たり、立花と一緒にセッシヨンしたいという客がやってきたり、良くも悪くも何事もなかった店が一転して騒がしくなる。立花は変化を嫌って春子を避けるが、その一方で、ピアノの演奏は明るく軽やかになっていく。春子は舞台俳優の夢をあきらめ、店の仕事をやめて実家に帰るといふ。客のいない店でひとり演奏する、そんな立花のような生き方も悪くないといふ、

立花にピアノを教えてほしいと頼む。  
立花は春子にピアノを教えない。別れの言葉もかけない。春子は帰郷をやめ、店に残る決心をする。

(おしまい)

登場人物

立花静夫 (45) ジャズピアノニスト

小川春子 (25) 舞台俳優志望

小林良一 (60) 喫茶ボンボンのマスター

ター

日暮里エレキ (25) 若手芸人

日暮里テル (25) 若手芸人

佐藤千鶴 (25) ギター奏者

清水小枝 (25) ウッドベース奏者

環状道路からふたつほど折れた細い道に、『喫茶ぼんぼん』はある。その狭い店内。古いボンボン時計の振り子と、本降りの雨音。

ドアのベル。

小林「いらつしやい。あれ、立花さんか。いつもより早いね。（腕時計を確認して）あ、ずいぶん遅れてるわ」

ボンボン時計の振り子。

小林「……ま、いいか。じゃあ、よろしくね。お客さん、いないけど」

重い革靴が店内を横切る。ぎしつとピ。アノの椅子がきしむ。指慣らしの前奏。少しあつて、静かなピアノ演奏が始まる。

ボンボン時計の振り子。

小林「お疲れさん」

立花「(コーヒーカップと皿を受け取る)」

小林「どうぞ」

立花「(少し冷ましてから、一口)」

小林「どう？ 豆、安いやつに変えたんだだけ  
どき。同じだよね、別に」

立花「(一口、うなづく)」

小林「だよね。ハハハ……。そう……。でき……

……まあ……。ああ、どうぞ」

立花「(一口)」

小林「そろそろかな、と思ってんだよね。こ  
の店も」

立花「(一口)」

小林「もう……。何年になるんだ？ 自分でも  
わかんなくなっちゃったな。立花さん、何  
年？ ここでピアノ弾くようになって。……  
……だよ。ヒマだと時間ってわかんなくな  
るよね。常連さんたちも、ひとり、またひ

とりつてき、いつのまにか見なくなったし。  
生きてんのかな……どうだろうな……まあ、  
次は僕かな。ハハハ……」

立花「(一口)」

小林「……ちよつと、笑つてよ、ハハハ。……ま、やっぱりそろそろかな、つていうのがね。そういう感じだよね。すぐにつてわけじゃないよ。具体的にはまだ何も決めてないし。まあ、やっぱり、立花さんには早めに言つといた方が、と思つてさ。そうだな……春まで……かな」

コーヒーカップを置く。さびしいピアノの和音が、ひとつ、ふたつ、……と  
続く。

小林「ハハハ……やめてよ」

環状道路の方で車のクラクションが連続で鳴り響く。少しあつて、ドアが勢

いよく開く。ピアノが止まる。

春子「（息を弾ませながら）やっています？」

小林「えっと……もう……」

春子「看板」

小林「……あ」

春子「あかり、ついてたから」

小林「消すの忘れてた」

春子「……終わりですか？」

小林「ええ、まあ」

春子「……。寒いな……」

小林「……はい」

春子「……雨」

小林「……ですネ」

春子「雪に変わるかも……」

小林「……。いいですよ。どうぞ」

春子「やったね（とドアを閉める）」

ボンボン時計の振り子。



春子「で、いくらだったと思います？ (ズ

ズーツと鼻をすする)」

小林「……さあ」

春子「八円。八円ですよ、八円。ぜんぶ一円

玉。見たことありますか？ 八円しか入って

ない財布」

小林「いやあ、さすがにそれは」

春子「でしょ？ びっくりして、あまりのお

金の無さに。こんなに無いか、とって。

逆に、なんで八円残ってんの？ この八円

なに？ こわっ、って思っつて。八円だけ残

るつて、そんなことありますか？」

小林「さあ……あるんじゃないですかね」

春子「……あ。あるか、別に」

小林「僕はないけど」

春子「私もない。……ほら、だから、ないん

ですよ、八円だけ残るつて」

小林「ハハハ……」

春子「で、そしたら大家さんが、八は末広が

りだから縁起が良いよー、つて。はあ？

はい？ 家賃払えないなら出て行って言つたばっかの大家さんが、ですよ。カーツ、つてなつて、このババアなに言つてんだ、大家さんおばあちゃんなんですけど、このババアつてなつたけど、でもまあ半年？ あ、六月、しちはちきゅうじゅう……あ、八ヶ月か。家賃払つてなかったし、こつちも悪いかなつて思つて。……ちよつと待つた、八ヶ月、また人だ。何？ 八ばっか」

小林「ねえ。ホント」

春子「で、まあ、アパート追い出されちゃつたんですけど。友達に泊めてくれて頼みまくつたけど、断られちゃいました。イビキがうるさいらしくて。ほら、私、おじいちゃん子だから」

小林「……だから？」

春子「そう。言いません？ おじいちゃん子つて、イビキうるさいつて」

小林「いや、聞かないけど」

春子「ホント？」

小林「……。はい」

春子「ふうん、そうなんだ」

小林「……。そうですよ」

春子「へえ。私は言うけどなあ。関西だけな  
んですかね。違うか。……まあ、いろいろ  
ありますよね。おもしろいですよね。……つ  
てことで、お金、今度でいいですか？」

小林「ああ、いいですよ」

春子「……すんません。（鼻から息を吸って、  
深い溜息）ああ、いい香り。やっぱり豆が  
違うんですよ、豆が。いい豆です、これ  
は。わかります。いい豆、ウン」

小林「そう……。ね。まあ……。どうします？」

「なんか食べます？」

春子「えっ……。だって」

小林「残りもんになっちゃうけど」

春子「……人だ。やっぱ八つて縁起がいいん  
だ。いいことあった」

小林「ハハハ。今晚どうすんです？」

春子「うーん……。適当に探します」

小林「明日は？」

春子「も、適当に探します。私、外でもどこでも眠れるから。特技」

小林「いやあ、寒いでしょ。風邪ひくよ。…  
…この二階にさ、空き部屋が…」

重い革靴が店内を横切る。

小林「あ、お疲れさん」

春子「一曲くらい聞かせてくれんじやないかなあつて、期待してたんだけど、なあ」

立花「(立ち止まる)」

春子「いかにも、って感じでピアノの前に座ってんのに、話しかけんなオーラがすごいんだもん。だから空気読んだケド。どうせピアノなんか聞かなそうだなって思ってたんでしょ。聞かないけど」

小林「いや、もう遅いから。ね？ それより、ホレ(と、皿を置く)」

春子「ウツソ、ちよっと待って」

小林「自家製あんこの小倉トースト」

春子「ああ……大好き……」

小林「甘い物好きと見た」

春子「正解。何で？」

小林「コーヒーをブラックで飲む人は甘党が多い、つていうのが僕の持論」

春子「すごい。ホントそう」

小林「遅い時間だけど、大丈夫でしょ？ 若いから」

春子「えー、太るとか？」

小林「いやいや、胃。胃もたれ」

春子「胃もたれ？ ……あんこで胃もたれます？」

小林「あんこでっていうか、あんまり遅い時間には食べると、朝起きた時にもたれるでしょ？」

胃

春子「もたれます？ 胃」

小林「もたれますよ。胃」

春子「もたれるかなあ？ 胃」

小林「もたれるもたれる、胃」

春子「もたれるもたれる言われると、非常に  
食べにくい……」

ドアのベル。

春子「……なんだよ」

大きな駅の近くの跨線橋の上。電車が  
通り過ぎる。

店内。ドアのベル。

春子「（思い切り明るく）いらっしやいませ  
ー！ ……なーんだ。お客さん、ぜんぜん  
来ないじゃん」

小林「だから、言ってるでしょ。お客さんな  
んか来ないの」

春子「えー、じゃあ私の仕事は？」

小林「ないよ。仕事なんか」

春子「えー、なにそれ。ここ喫茶店じゃない

の?」

小林「喫茶店っていつでもいろいろ……ああ、

立花さん、気にしないで」

春子「こんばんは、立花さん。えっとお……

なんか、今日からここで働くことになっちゃ  
いました。あつ、小川春子です。新人でー  
す。よろしくお願いしまーす」

小林「だから……お給料とか出せないから」

春子「いいのいいの。二階の部屋、タダで借  
りてんだし」

重い革靴が店内を横切る。ぎしつとピ

アノの椅子がきしむ。指慣らしの前奏。

少しあつて、静かなピアノ演奏が始ま  
る。

春子「おつ、始まった」

立花「(演奏を続けて)」

春子「……。ちよつと待った」

立花「(演奏をやめる)」

春子「暗い暗い。そんなんだから、お客さん  
来ないんだよ。もつと明るくて、楽しい曲  
じゃないと。例えばさ」

タップダンス。

春子「ほら。こんな感じ。ラッタター」

軽やかなタップダンス。

小林「えっ？　なんで踊れるの？」

春子「練習したから。私、こう見えて舞台役  
者目指してんですよ。オーディション落ち  
まくってるけど」

小林「へえ、上手じゃない」

軽やかなタップダンスが続く。と、そ  
れに負けじとにぎやかなピアノ演奏が  
始まる。どんだんリズムが速くなって  
いく。



春子「ちよつと待つた、速い速い」

ばんばん、と鍵盤を叩くように弾き、  
演奏は途切れる。速足で店を出ていく。

小林「……帰っちゃつた」

春子「私のせい？」

小林「いや」

春子「嫌われたかな」

小林「あの人、いつもあんな感じだよ。また、  
アレじゃないかな、橋の上で電車でも眺め  
てさ。好きみたいよ、電車」

春子「ふうん」

小林「すぐ戻ってくるよ」

ドアのベル。

小林「早いな」

春子「あつ、いらつしやいませ！ (こそこ)

そと嬉しそうに) お客ですよ、お客。お席  
へどうぞ!」

ボンボン時計の振り子。

エレキ「(声を抑えて) どーもー。エレキで  
ーす」

テル「(やる気なさげに) テルでーす」  
エレキとテル「日暮里エレキテルでーす。ビ  
リビリ!」

テル「……このビリビリ、だけどさ」  
エレキ「うん」

テル「手の形をもつと……こうした方がカッ  
ケエよ」

エレキ「えー、ダメだよ」

テル「何だよ」

エレキ「かつこいいのとかダメだよ」

テル「いいじゃねえかよ。ビリビリ!」

エレキ「あと、そんな感じの前に誰かがやつ  
てんの見たよ」

テル「……。じゃダメか。ポッポ師匠に怒られるもんな」

エレキ「パクリ、ダメ、ゼツタイ。だもん」

テル「……。ポッポ師匠のそれもさ」

エレキ「やっぱ今まで通りに」

テル「ん？」

エレキ「二人が、ちゃんと対称になるようにしてさ、こう、ビリビリ！」

テル「もっとおもしろえ顔しろよ」

エレキ「してるよ」

テル「つまんねえよ」

エレキ「ポッポ師匠嫌いじゃなかった？ 顔で笑い取るの」

テル「顔ぐらいしかねえだろ。笑えんの」

エレキ「……。じゃ作ってよ、ネタ」

テル「ヤダよ、めんどくせエ」

エレキ「そういうところじゃないの？」

テル「うるせエな。俺あデスクワークはしねえ主義なんだよ。ポリシーだよ。いいから、

ほら、ちやちやっと」

エレキ「(ネタ帳を読む) 日暮里エレキテルのショートコント。友人をなぐさめる言葉その一。僕もうダメだよ。仕事は続かないし、お金もないし、彼女も出来ないし……。もう生きてる意味なんかないんだ」

テル「そんなことねえって」  
エレキ「なぐさめないでくれよ。余計みじめになるじゃないか」

テル「イヤイヤ。お前カッコイイよ」

エレキ「僕のどこがカッコイイって言うんだよ。教えてくれよ」

テル「ほら、あの人に似てるよ、あの人」

エレキ「……誰? あの人って」

テル「ほら、よく見るんだけどなあ」

エレキ「……もしかして、芸能人?」

テル「ほらほら、えっと……誰だっけ」

エレキ「ねえねえ、誰? 早く教えて」

テル「あ、近所の八百屋のおじさんだったあ」

エレキ「芸能人じゃないのかあー」

エレキとテル「うーん……ビリビリ!」

テル「……。ンだよ、コレよお。クソつまんねえじゃねえかよ」

エレキ「えー、だって八百屋のおじさんに似てんだよ。面白いじゃん」

テル「なんで面白いんだよ。八百屋のオヤジがめっちゃイケメンだったらどーすんだよ」

エレキ「……。いや、それは」

テル「八百屋のオヤジはブサイクって、ただの偏見じゃねえかよ」

エレキ「だって、高橋さんとおじさん、イケメンじゃないし」

テル「誰だよ、高橋ってよお」

エレキ「ウチの近所の八百屋の……」

テル「それは、高橋んとこのオヤジがブサイクってだけだろ」

エレキ「……。そのまま言うほどブサイクじゃないけど。ちよつとカエルみたいな顔だなあつていう……」

テル「なんで高橋のオヤジに気がついてんだよ。それかき、似てるって言われて、それ

が芸能人じゃなくて、誰も知らない八百屋のオヤジだった、っていうところが面白いワケ？」

エレキ「……面白い」

テル「だったら最後のツツコミが弱いだろお。

何だよ、芸能人じゃないのかあーつて。誰

だよ、知らねーよ！ だろーがよお」

エレキ「……そう？」

テル「ブサイクなヤツに似てるって言われる

所が面白いんだったら、八百屋のオヤジじゃ

なくて、みんながイメージできるブサイク

じゃなきゃダメだろうがよ。ハダカデバネ

ズミとか、ダイオウグソクムシとか、みん

な知ってる」

エレキ「みんな知らないよ」

テル「ダメ、却下。他は？」

エレキ「これがダメなら他のもダメだよ」

春子「（軽く咳払いする）」

エレキ「あ……すいません」

春子「いや、そうじゃなくて。もしかして…

…芸人さんですか？」

テル「え？ 知ってる？ 俺らのこと」

エレキ「知ってる人なんていないよ」

テル「わかんねえだろ」

春子「練習するんだったら、もっと大きな声  
でやったらどうですか？」

エレキ「迷惑じゃないですか？」

春子「大丈夫ですよ。どうせお客さん来ない  
し。それに私、ちゃんと見てみたいなあ」

テル「そう？ 見たい？」

春子「見たい見たい」

エレキ「えー……イヤだよ……早いよ、まだ。  
自信ないし」

テル「そんなんでどうすんだよ。ここで出来  
なかつたら、ポツポ師匠の前で出来るわけ  
ねーだろ」

エレキ「……そりゃそうだけど」

テル「とにかくやろうぜ！」

ボンボン時計の振り子。

テル「イヤイヤ、いくら客って言ってもさ、

他のお客さんに迷惑かけても気にしないなんて、許せないじゃない。だからさ、俺バ

イト代表して言っっちゃったんだよ」

エレキ「うんうん、何て？」

テル「おい！ そのお前！ お前だよ！

全裸にチーズバーガー一丁で、出来ないム

ーンウォークしながら、第九の歓喜の歌を

熱唱して、ひとり号泣してるお前！ お前

だよ！ どう見てもお前しかいねーだろう

がよ！ おい！」

エレキ「そうそう、言っっちゃって」

テル「ご一緒にポテトもいかがですか？」

エレキ「オイオイ、なんだよそれー……」

エレキとテル「うーん……ビリビリ！」

エレキ「……。つていう、まあ、こんな感じ

なんですけど……」

春子「……あ、終わり？ どうでした？」

小林「僕？ いや……いいんじゃない？」



春子「あのお、何が面白いんですか？」

小林「ちよつ……そういう言い方。いや、面

白かったよ。ただ僕はその、あんまり若い

人のお笑いとかわかんないから」

エレキ「やつぱりダメだ……」

テル「ツッコミが弱えよ」

春子「面白いですって、たぶん」

テル「ビリビリの手の形がこう……こっちの

方がいいって」

エレキ「ポツポ師匠に怒られるよ」

テル「でもさ」

春子「あの、さつきから気になってたんです

けど、ポツポ師匠って？」

エレキ「あ、僕らの師匠です。鳩山ポツポ。

知りませんか？」

春子「知らない」

エレキ「癒し系漫談とか言われて、ちよつと

話題になったりした、らしいんですけど。

実際よく知らないんですけど。で、今度ポ

ツポ師匠にネタ見てもらえる事になって。

その練習してて」

春子「ポッポ師匠って恐いんですか？ さっ

きからすごいビビってるけど」

エレキ「恐いって言うか……笑ってるところ

見たことないよね」

テル「ねえ。舞台じゃニコニコしてっけど」

エレキ「あだ名が『鉄仮面』ですもん。無表

情で、じーっと若手のネタ見るんですよ。

で、つまんないネタでもやろうもんなら、

そりやもう……」

春子「……なに？」

テル「静かにナイフでめった刺しにされて、

腹引き裂かれて、ハラワタゆっくり引きず

り出されて、最後に首をこう……チョン」

春子「えっ……」

エレキ「いまだにダメ出しが夢に出てくるっ

て言つて、カウンセラーに診てもらってる

先輩もいますよ。いっぱい」

春子「ポッポ師匠……」

エレキ「ネタ作り直す？」

テル「あたりめえだろ」

春子「ちよつと待って。たまたま私たちがつ

まんなかっただけで、他の人は面白いって

思うかもしれないじゃん？」

エレキ「やつぱ、つまんなかったんだ……」

ドアのベル。

春子「おっ、いいタイミング。立花さん。ちよつ

と。ここ座って」

立花「……」

春子「なにしてんの。早く」

立花「(椅子に座る)」

春子「それじゃあ……えー、ウン、今人氣急

上昇中の若手お笑いコンビ、日暮里エレキ

テルのお二人です。どーぞー(拍手)」

エレキ「……えっ？」

春子「……どーぞー」

エレキ「あの……こちらの方は？」

春子「あ、この人が仮想ポップ師匠ね。立花

さんを笑わせられたら、ポツポツ師匠もきつと大丈夫だよ」

立花「（椅子を立つ）」

春子「いーじゃん、立花さん。お願い」

立花「（無視して店を出ようとする）」

春子「いつも壁とにらめっこしながらピアノ弾いてるんでしょ？ 私、立花さんの背中しか見てないもん」

小林「グランドピアノだったら、こっち見て演奏できるけどね。まあ、あつても置く場所ないけど」

春子「壁ばっか見てるから、暗ーい曲しか弾けないんだよ。たまにはお客さんの気分を味わってさ、ね？ けっこういい店じゃん、狭くて汚いけど」

小林「こぢんまりとしていて趣がある、ね」

春子「ホラ、座って座って」

小林「ゴメン、立花さん。ちよつとつきあつてあげて」

立花「（少しあつて、椅子に戻る）」

春子「それじゃ……ウンウン、令和の爆笑王  
こと、日暮里エレキテルのお二人です。ど  
ーぞー」

一同、拍手。

テル「……で、何やんの？」

エレキ「えっ？ ……何やろつか？」

テル「ハンバーガー屋は？」

エレキ「それ、やったよ。やって、スベった

じゃん」

テル「そつか。じゃあ……」

エレキ「慰める言葉シリーズは？」

テル「どうすんの？ 一からやんの？」

エレキ「一番おもしろいのって何番？」

テル「全部つまんねえよ」

春子「ちよつと！（ドタドタ、と割って入

り）何やってんの。二人でブツブツ言い合っ

てさあ。イライラすんなあ」

エレキ「いや、だから……」

春子「だから、じゃないじゃん。ポップ師匠の前でもそうやんの？」

エレキ「それは……」

テル「いやあ、俺らの笑いつてのはさ、もつとこう、緻密に計算された」

春子「で、結果これじゃん。突っ立ってるだけじゃん。ネタ飛んだら飛んだでさ、何かやんなさいよ、一発ギャグとか何でもいいから。ないの？ あるでしょ？」

エレキ「僕はそういうのは……」

テル「じゃあ俺が。ウンウン……。執行猶予、ゲツトだぜ！」

春子「……。何だ、それ。つまんない上に、半分パクリじゃんか」

エレキ「(くすくす笑っている)」

春子「相方が笑うな！ あんたが甘いから、変な勘違いするんではよ？」

テル「……勘違い？」

春子「勘違いじゃん。自分のこと面白いつて思ってるでしょ？ 意味わからんわ」

テル「はあ……（不貞腐れて）」

春子「なんだ、文句あんの？」

テル「別に」

春子「言いなよ。聞く」

テル「いや、いいっすよ……」

春子「言いなつて」

テル「……。いいっすよ」

春子「……。（メニューで叩く）なんもない

んかい！ たっぷり間取つて。返せや、今

の時間」

小林「春ちゃん、メニューで叩かないで。折

れちゃう」

エレキ「あの……」

春子「なに？」

エレキ「……」

春子「……。（メニューで叩く）って、あんた

もないんかい！ かぶせんなや、今見てた

やろ、相方スベったん」

小林「春ちゃん、メニュー……」

エレキとテル「（しゅんとなつて）」

春子「……なに！ なんなん！ もつとシヤ  
キツとしーや！」

エレキ「暴力やめて下さい」

春子「は？」

エレキ「暴力やめて下さい。テル君はこう見  
えて繊細なんです。強めのツツコミとか、  
苦手なんです」

テル「いいよ、もう」

エレキ「テル君、お坊ちゃん育ちなんです。  
割り箸は使った後にちゃんと袋に入れて捨  
てるし、中学の修学旅行の時は電動歯ブラ  
シ持つてきたし、実家でプードル飼ってる  
し。トイじゃなくて大きい方の。だから、  
慣れてないんです、暴力に」

テル「もういいって」

春子「どーでもいいけど、暴力っていうのや  
めてくれる？」

テル「メアリーです」

春子「なにが？」

テル「プードルの名前」



春子「どーでもええわ。あんたの実家の犬の名前なんて」

小林「まあまあ、ね？ 一旦仕切り直してさ、最初からやりなおしてもらったら？ 春ちゃん、メニュー置いて」

春子「（聞こえず）一番大事なんはさ、人を笑わせたいって気持ち違う？ 目の前の人を笑顔にしたいっていう気持ちか、大事なん違うの？」

エレキとテル「はい……」

春子「……。なにが？」

エレキ「笑わせたいって気持ち……」

テル「大事……はい……」

春子「ホンマにわかってんの？ 塩かけられ  
たナメクジみたいな顔して」

エレキ「わかってます」

春子「じゃあ、どーすんねん、この空気」

エレキ「……ごめんなさい」

春子「あのな、ゴメンですんだら、芸人なんかいらんねん。どーすんのか聞いとんねん、

こつちは」

テル「……どうしたらいいですか？」

春子「……。よし、脱げ」

テル「えっ？」

春子「脱げて、早よ」

テル「いやいや、それは」

春子「なんもないなら、そろもう、パチパチ  
でもドリルでも、なんかせなしゃーないや  
ろ」

エレキ「脱ぐのだけはやめろ、つてポツポ師

匠から言われてて……」

春子「ポツポツポやかましい！ 知らんわ、

そんな三流芸人」

テル「師匠まで悪く言わんで下さいよ」

春子「脱げ、脱げて、早よ！」

バタバタ、ともみ合う。メニューで叩  
きまくる。

テル「イヤッ！ やめてっ！」

エレキ「ちよつと、落ち着いて下さい。テルくん、泣いてる！」

春子「大阪名物見せたらんかい！」

立花「(ブツ、と吹き出す)」

春子「……立花さん？」

一瞬静かになって、春子、続いて小林、笑い出す。

エレキ「早く着な」

テル「うん……ありがとう」

満席の店内。客たちの静かな会話。小さな拍手が起こる。明るいピアノ演奏が始まる。客たちは会話をやめ、演奏を聞く。

小林「(ドアを開け、店の外から) 春ちゃん、ちよつと……」

春子「はい。(と店を出てドアを閉め) なん

ですか？ マスター」

小林「マスターはやめてよ。それよりさ、なんで急にこんなことになっちゃうのよ」

春子「だから、ちよつと動画のせたの」

小林「ちよつと？ で、これ？」

春子「SNSって、そういうもんでしょ」

小林「どうすんのよ、これ」

春子「いいじゃん。繁盛してんだから。(にやにやして) 稼ぎましようよ」

小林「(少し笑って) 稼ぐって……あんまり忙しくてもねえ」

春子「そのうち落ち着きますよ。こういうのは長続きしないから」

小林「えっ、そうなの？」

春子「うん。みんな若いもん」

小林「そうなんだ……そういうもんか……」

春子「立花さんも楽しそう。なんとなく」

小林「そうかな？」

春子「そりゃ、観客いた方がいいでしょ」

演奏後の店内。客たちの会話が戻る。

春子「はい。コーヒーブレイク」

立花「(カップを受け取り、一口)」

春子「……どう？ 私淹れたの」

立花「(うなずいて、二口)」

春子「やったね」

ドアのベル。

春子「いらっしやいませ」

ばたばたと店内を横切る。

千鶴「(鼻息荒く) さあ……やろう！」

小枝「(追いかけてきて) チズ、待って、落ち着いて」

千鶴「見て。いた」

小枝「こらっ！ ダメでしょ！ なんてそんな人を指差すの。こっち来て。私の後ろ。ご

めんなさい、色々失礼なことを……。あの  
……立花静雄さん、ですか？」

立花「(うなづく)」

小枝「やっぱり。……あ、清水小枝といます。こっちは佐藤千鶴つていいます。それで……あの、私たち、あなたのことが知ってます」

千鶴「語らせろ」

小枝「黙って。たまたまSNSでこのお店のこと見つけて、それで、ピアノがある喫茶店って珍しかったから、楽しそうだから今度行ってみようよ、って話してて」

千鶴「言い出しっぺ。ハイ」

小枝「それで、色々写真とか見てたら、このピアノ弾いてる人って立花さんじゃない？  
ってなって」

千鶴「最初に気付いた人。ハイ」

小枝「でも、最後の演奏から十年以上経つし、トリオのこと調べても出てこないし、やめちゃったのかなあって。人違いかもって言っ

てたけど……本人だった」

千鶴「私ゼツタイ本人だって言った」

小枝「うん。チヅは最初から間違いないって

言ってたけど、私はね、人違いかもって」

千鶴「私は言っていない」

小枝「チヅは言っていないよ。言っていない」

千鶴「私の番ね。一四才。二人でスカイツリ

ー見に行ったのね、で、帰りに公園の便所

に入ったの、あその公園、わかるでしょ、

あその公園、クロワッサンみたいな壁が

ある、そしたらその壁の前でやってたの、

やってたでしょ、演奏、三人で、やってた

よね、その時は三人いた、最初はつまんな

いって思った、だって、ピアノとか、ジャ

ズとか、絶対つままないじゃん？」

小枝「こらっ！ ダメでしょ！ なんでそう

つままないとか言うの」

千鶴「と思ったけど、違ってたってこと。もう、

ビヨーンって、ピコーンって、ボイーンっ

てなった」

小枝「何それ？」

千鶴「マイ・ハート。心驚掴み？　つていう

言葉あつたっけ？」

小枝「要するに感動したんでしょ？」

千鶴「イヤ、そーじゃないんだよ。要すれな

いんだよ。やつぱビヨーン、だな」

小枝「感動したのね」

春子「ま、とりあえず、席どうぞ」

小枝「あ、はい」

春子「ご注文は？」

小枝「えっと、じゃあ、コーヒー二つ」

春子「音楽やられてるんですか？　ミュージ

シャン？」

小枝「いや、好きでやってるだけで。プロと

かじゃ全然ないです」

春子「ギターと……こっちは、ウッドベース

？」

小枝「はい」

春子「狭いんで、楽器はそっちの、壁のどこ

に置いといて下さい。立花さんの演奏聞き



に来たんですか？」

小枝「はい」

千鶴「違う。いっしょにやりに来た」

小枝「あの、ご迷惑でなければなんですが、

後で演奏を、ご一緒させていただくことは

……。あの、実力がないのはじゅうぶんわ

かってはいるんですけど。……是非」

千鶴「やろうぜ」

春子「いいじゃんいいじゃん。聞きたい」

重い革靴が店内を足早に横切る。ドア  
のベル。

春子「立花さん」

小枝「……怒っちゃった？」

千鶴「ヘンな人」

小林「春ちゃん。お仕事は？ 忙しいんだか

ら」

大きな駅の近くの跨線橋の上。電車が

通り過ぎる。

春子「(歩いてきて) ……立花さん? ……

あーいたいた。(近くにきて) ……ちよつと、やめたほうがいいですよ。そうやって、身乗り出して線路見下ろしてると、なんかへんなこと考えてるみたいに見える。私、ドキつとしたもん」

立花「……」

春子「……えつ、やめてよ。違うよね?」

電車が通り過ぎる。

春子「うー……寒い。まだいますよ、あの二人。コーヒ一杯でねばってる。まあ、私と似たようなかんじだもんな。ないよな、お金なんか。どうします? お店、戻らないなら、そう伝えときますよ」

電車が通り過ぎる。

春子「……ふーん。……ま、どうでもいいけどさ。電車、好きなんですか？」

立花「……」

春子「えー……好きでもないのに、こんな寒  
い中……わからんわ。電車ね……あんま好  
きじゃないな、私。線路は続くよどこまで  
も……って、線路ってホントにどこまでも  
続いてるんですかね？」

立花「……」

春子「いや、わかってますよ。だって、終点  
あるもん。そうじゃなくて、もつとこう、  
例え話っていうか、人生の比喩？ みたい  
な」

立花「……」

春子「そんな目で見ないですよ。こんな暗くて  
寒い橋の上にいたら、そんなことも考え  
ますよ。立花さんのせいだから」

立花「……」

春子「そうそう。だから聞いて。どこまでも

続くっていうのは、同じところをぐるっと回って、結局もとに戻っちゃうってことでしょ？ それって、前に進めないってことじゃん」

電車が通り過ぎる。

春子「舞台のオーディション受けたんですよ。よくわかんないけど、けっこうちゃんとしたヤツっぽい。もうすぐ結果出る。手応えあり。今まで散々落ちてきたけど、いちばんいいそうな気がする」

立花「……」

春子「ウソだと思ってんでしょ。ホントに。私、絶望的にセリフが苦手で、演技審査ってなると、いっつも頭真っ白になっちゃって……なんにも出てこなくなっちゃう。でも、今回は演技とかあんま関係ないみたいで、長い黒髪？ あと、背が高いつてところが入られたみたい。だから、いける

かなって。なんだろな……電信柱の役でも  
やんのかな、ハハハ……」

立花「……」

春子「笑ってくれよ。あーあ、もうなんか、  
どうでもええわ……。寒いし、つまんない  
から、もう帰る。立花さんは？ どうすん  
の？」

立花「……」

春子「そう。じゃあね」

足音が遠ざかり、止まる。

春子「あつ、そうだ。ピアノって、今から練  
習して弾けるようになります？ 一人で、  
誰も聞いてないのにピアノ弾いて、で、気  
がついたらおばちゃんになってて……みた  
いな、そんなもええかなあつて、思う。  
ホンマにそう思う」

立花「……」

春子「ハハハ、なに？ その顔。でも……い

ろいろ聞いてもらって、なんか安心した。  
ありがとうございました」

電車が通過して、途中で春子の声が聞  
こえなくなる。

ボンボン時計の振り子。

春子「(おおあくび)」

小枝「あの……ごちそうさまでした」

春子「ん？ ……ああ、ごめん」

小枝「こつちこそ、遅くまですいません」

千鶴「またね」

春子「……なーんかお腹すいちゃったな。す

かない？」

千鶴「すいた」

小枝「あんまり遅くに食べるとよくないよ。

もたれるよ、胃」

春子「小倉トースト食べる？」

小枝「食べる!!」

千鶴「うん」

春子「バター塗る？」

千鶴「塗る。いっぱい」

小枝「私やめとく。……あ、やっぱ塗る」

オーブントースターのダイヤルをひねる。

春子「どーん。手作りのあんこ」

小枝「すごい。手作り？」

千鶴「えっ、あんこって作れんの？」

春子「そりゃ作れるでしょ。私が作ったんじゃないけど」

小枝「あんこって小豆でしょ？ 小豆を……」

どうするの？」

春子「……ゆでるんじゃないの？」

千鶴「えっ、小豆って、お赤飯に入ってるや

つじゃないの？」

小枝「そうだよ」

千鶴「じゃ、炊くんじゃない？」

小枝「そっか」

春子「炊いて、なんか、潰すんじゃない？」

千鶴「あんこって小豆じゃないでしょ。だっ

てお赤飯、甘くないじゃん」

春子「……そうだな」

小枝「あんこは小豆だよ。逆にお赤飯が小豆

じゃないんじゃない？」

千鶴「えー、小豆だよ。だって、お赤飯って、

小豆色だもん」

春子「アレじゃない？ 両方とも小豆だけど、

品種が違うんだよ。品種改良でさ、甘い小

豆作ったんだよ」

小枝「甘小豆、みたいなの？」

春子「そう。例えばね」

千鶴「甘くできんの？ 小豆を？ そんなん

できんの？」

春子「できるよ。だってすごいもん、品種改

良って。テクノロジーのちからって」

小枝「でも、あんこって昔からあるよ」

春子「……それは」



千鶴「あー、間違えた」

春子「品種改良だつてあるよ、昔から」

千鶴「昔つて、いつ？」

春子「えっ……ずっと前。すごい前」

千鶴「ほら、知らないじゃん」

春子「じゃあ、どうやって小豆を甘くすんのよ。ないでしょ、他に」

千鶴「それじゃあさ、他のも甘くできんの？

ピーマンとか」

春子「あるよ。甘いヤツ」

千鶴「ウソだあ」

春子「ウソじゃない、あります」

小枝「えっ、それつてホントに甘い？ 野

菜の甘味的なヤツじゃなくて？」

春子「イヤ、あんこの小豆みたいには甘くな

いよ。でも甘いやつ」

小枝「ウソ？」

千鶴「マンゴーじゃない？」

春子「おい、バカにすんな？ ピーマンとマンゴー間違えるか」

千鶴「だって、あんな苦いのが甘くなるワケない」

春子「だから、それも品種改良のちからよ」

小枝「でも逆に怖くない？　なんか味を操作してるみたいで」

春子「それな。私、時々考えるんだよね。テ

クノロジーの進化って、怖いな、って」

小枝「うん……あるよね、そういうの」

春子「ね」

千鶴「……。お砂糖入れればいいじゃんね」

チン、とオーブントースターが鳴る。

ドアのベル。

春子「あっ」

重い革靴が店内を横切る。ぎしつとピ  
アノの椅子がきしむ。指慣らしの前奏。  
少しあって、今まで演奏したことのない、  
明るくて軽快で、シンプルな曲を

演奏する。しばらくピアノ演奏が続く。  
ギターが加わる。続いてウツドベース  
が加わる。合いの手のように、チン、  
とオーブントースターが鳴る。

ボンボン時計の振り子と、本降りの雨  
音。さびしいピアノの和音が、ぽつん、  
ぽつんと続く。和音が途切れて、ポー  
ン、ポーン、と心音のように固い音が  
続く。ドアのベル。ピアノが止まる。

小林「はあ、着いた。もう春だねえ。雨があつ  
たかいわ。ごめんね、立花さん。留守番頼  
んじやって」

がさがさ、と買い物袋を置く。

小林「とりあえず色々買ってきたけど……やつ  
ぱり送別会みたいなのは、やらないほうが  
いいのかな。今の若い人はそういうの嫌が

りそうだし。……どうかな？」

立花「……」

小林「……立花さん？」

立花「(首を傾げて)」

小林「わかんないか。……立花さんには謝らないといけないな。いや……なんて言うかねえ……。店、閉めるって言ったでしょ？」

なんとなくそんなタイミングなのかなあつて、前は思ったんだけど、今はもうちょっと……ウン」

立花「(頭を下げる)」

小林「いやいや、やめてよ。こっちの立場がないじゃない。だったらさ、そこはさ、お互い様ってことで、そうしましょうよ。ね。」

……立花さんって、お酒飲むの？」

立花「(ちよこつと、と指で)」

小林「あ、じゃあ一緒だ。安上がりでいいよね。……間に合うかな。駅の向こうにねえ、北海道産のあん肝を出す店があるのよ。汚い店だけど。ポン酢じゃなくて、表面をカ

リツと焼いた、コテコテのあん肝をき、辛  
ーい日本酒でき、ね。……どうです?」

立花「(うなずく)」

小林「そう。良かった。ま、色々話しましよ  
う。お互い」

ドアのベル。

小林「ああ、おかえり」

春子「ただいま、っと」

小林「あら。またバツサリ切ったねえ。いい  
じゃない。似合う似合う」

春子「もー、あたまが軽い軽い。中学生以来。  
なんですか? コレ」

小林「いやね、送別会みたいなのをやろうか  
など思ってた買ったの」

春子「そんな、気遣わなくていいです。ごめ  
んなさい、急に決めちゃって」

小林「(買物を出しながら) あれ? おかし  
いな、甘いものばっかだ。色々買ったんだ

けどな……」

明るいピアノ演奏が始まる。

小林「なにか手伝えることある？」

春子「ううん、大丈夫。荷物少ないし」

小林「ちよつと前まで車あつたんだけどね。

売っちゃったんだよなあ、乗らないから」

春子「ホント、大丈夫ですから」

小林「引越し蕎麦食べに行く？」

春子「引越し蕎麦？ 実家帰るのに？」

小林「引越しには変わりないでしょ」

春子「引越し蕎麦って、ご近所さんに配るん

じやないんですか？ 引越しのあいさつす

るときに。食べるんじゃないくて」

小林「そうだっけ？」

春子「……そうでしょ」

小林「そうだっけ。ハハハ……」

だんだん雨が強くなる。

小林「大阪かあ……いやあ、寂しくなるね」

春子「……」

小林「大阪帰って、なにをするの？」

春子「……ん？」

小林「やっぱり役者さん目指すの？」

春子「ああ……えつと、新しくなにか探します。春だし」

小林「そっか。なんかもったいない気もする

けどな。向いてると思うよ、役者さん」

春子「（ごまかし笑い）そうだ。立花さん。

ピアノ教えてください。なんでもいい、私でも弾けるような、簡単な曲でいいから」

ピアノ演奏がびたりと止まる。

春子「暗いのはヤダ。明るくて、楽しいヤツがいいな」

小林「ハハハ、一番弟子だ。教えてあげたら

？ ……もう、最後なんだし」

立花「……」

小林「どうしたの？ 立花さん？」

雨が強くなって、振り子が聞こえない。

春子「教えてください」

立花「（首をふる）」

春子「教えて」

立花「（首をふる）」

春子「教えてよ！」

立花「（うつむく）」

春子「なんで！ なんで教えてくれないの！

お願いだから、教えてよ。教えてくれ

ば、私……（クンと鼻を鳴らす）」

雨が最も激しくなる。だんだん弱くなっ

ていく。落ち着いてきて、ボンボン時

計の振り子が聞こえ始める。

春子「立花さん……ありがとう」



ボンボン時計の振り子。

春子「はー(と、大きく体を伸ばし)……あ。

時計」

小林「えっ？」

春子「その時計、音はならないんですか？」

小林「時計？ ああ、これ？」

春子「ぼーん、ぼーん、って」

小林「なるよ。ゼンマイ巻けば」

春子「ホントに？」

小林「うん。だから店の名前も、ホラ」

春子「喫茶ぼんぼん。あつ、そっか」

小林「ピアノの邪魔かと思って、ならないよ  
うにしたのよ。……よっと」

脚立に上がり、ボンボン時計のゼンマイを巻く。

小林「巻くの、けっこうしんどくてね。ちや

んとなるかな、久しぶりだから」

ボンボン時計が八回なる。

春子「……あ。八回」

ドアのベル。

小林「いらっしやいませ」

春子「……。いらっしやいませ！」

明るいピアノの演奏と、タップダンス。

(おしまい)